

風をつかむ～需要獲得の波に乗れ!

メモリーシステム搭載のオプティカットが好評

自動で幅・厚み決め可能

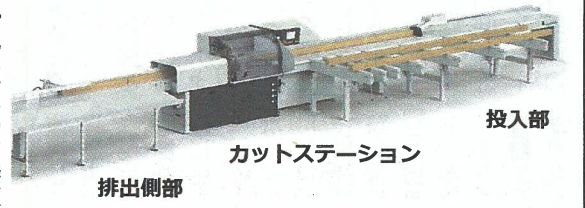
DKSH

DKSHマーケットにある。同社では、自動エクスパンションサー、幅・厚み決め機能「メモリーシステム」(東京モリーシステム)を京都、林靖夫社長は、準備したモルダーの売れ行きが伸びている。オペレーターが手で幅・厚み決めを行うモルダーに比べ、正確な刃物の位置決めが誰でも素早くでき、よく使う寸法を登録し、必NC(自動位置決め装置)のメリットを十分に享受できる点も市場に受けられている。また、同じくヴァイ



メモリーシステム

・厚み決めを行うモルダーに比べ、正確な刃物の位置決めが誰でも素早くでき、よく使う寸法を登録し、必NC(自動位置決め装置)のメリットを十分に享受できる点も市場に受けられている。また、同じくヴァイ



投入部
カットステーション
排出側部
オプティカット

ニッヒの「オプティカットs50プラス」も、高機能な技術を普及版のレンジに載せることができるようになった。従来のs50シリーズは、カット機前後の投入/排出側のオプションが少なかったが、s50プラスが誕生したことで、より多くの搬送技術を搭載できるようになった。上の写真の例では、投入部にはクロスコンベヤーを、排出側には送りベルトコンベヤーとキッカーを装備。これにより、部材投入のバッファ機能、カット後の部材選別機能を保持させることができ、さらには不要となる欠点部分はクロスカット直後の開閉ゲートに50プラスだ。

乾燥システム軸に国産材活用推進

生産強化、コスト削減もたらすウッド・ビー

フルタニランパー

フルタニランパー(石川県金沢市、古谷隆明社長)は、木材業界の活性化や国産材活用の促進に独自の取り組みで貢献する。同社が石川県内の建設事業者・水処理事業者と共同開発した高速木材乾燥技術「Woodbe(ウッド・ビー)



乾燥倉庫
防火石を敷き詰めた乾燥機

「」は、製材工場の木材乾燥効率を高める画期的なシステムだ。ウッド・ビーの技術の鍵を握るのが、特殊石材・防火石。防火石を備えた造水器に通常の水を通し、粒子が微細化した水に改質。この改質水を蒸気化し、乾燥設備内に吹き詰められた防火石の遠赤外線効果を利用して木材に浸透させると、改質水が木材を内部から乾燥させるという仕組みだ。ウッド・ビーによる乾燥のメリットは多種多様だ。既存乾燥機を改良することで、新規設備ほどの初期投資費用を掛からず、新たに設置スペースを用意することもない。またシステム導入までの工期も短い。乾燥の精度、速度はとも高水準が期待できる。同社の研究では、外材や国産材製の乾燥で従来より30〜70%の時間短縮結果を得ている。スピーディな乾燥でも精度は高く、ひび・割れ・曲がりが少なく、艶のある仕上がりとなり歩留まりも向上する。コスト削減にも効果



ウッド・ビーは実用的運用と同時に知見蓄積も進む

乾燥機にも導入している。乾燥期間を大幅短縮は、ポイラ促進への協業体制を検討する事例も出てきている。導入企業は全国に広がり、国産材活用を推進している。同社は外材製品を中心に幅広い品目を取り扱っており、国産材の拡充も視野に入れている。ウッド・ビーを軸とすることで、導入企業との関係のビジネスチャンス拡大も見えてくる。

道内随一の建築材生産工場

大径木消費を考えた第4製材工場が稼働

ハルキ

ハルキ(北海道茅部郡森町、春木真一社長)は、2022年に第4製材工場を本格稼働させた。同工場は、増加する大径木をスムーズに製材するほか、原木投入や製材品の積み込みなどで省人化を図ることもできる。同工場のリングバーカーは、大径木対応のエンジニアリングの製材機は、キクカワエンタープライズの全自動本機BT-54E/C54-4型クリアシステムなどを設備。同工



2022年に本格稼働となった第4製材工場の内部。最新機械がそろい、製材能力も高い

ための専門工場をオープンする。第4製材工場の完成で、同地域の杉やトド松を有効活用した構造材を生産することで製材、集材材、プレカットまで一貫して行える体制を構築している。春木社長は「国産材利用を製材からプレカットまで一貫して行える企業として、近年は製材能力の向上に取り組みしてきた。今後増える大径木をもストレスなく製材できるようにするとともに、各設備の無人・省人化を行うことで、将来の木材、人材の状況を想定した工場を完成させることができた。この体制で、国産材活用が増えるなかで安定的に製品を供給していく」と語る。

SDG持続可能な森林循環への取り組み

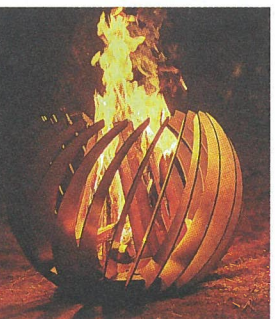
齋藤木材工業

齋藤木材工業(長野県小県郡、齋藤健社長)は地域材であるカラ松を使い、構造用集材を製造・販売している。集材製品の歩留まりは丸太から30%にとどまり、丸太全体の70%はおが屑やウッドチップ、燃料などにしてきた。



カラ松の新材

特にウッドチップは、県外の製紙工場へ運搬するため非効率で、価格的にも先人の方たちが育てた森林資源に還元できない状況がSDGsへ取り組むうえで課題として挙げられてきた。今回、SDGsの取り組み目標でもある持続可能な森林循環を維持するために、70%の部分を付加価値を見い出した。新製造専用の工場を会社敷地内に建設し、集材材としては活用できない木材がこの工場に運び込まれる。品質管理された薪として商品化され、専用のECサイトやキャンペーン場へ販売を開始した。また、昨今のアウトドアへの注目の高まりに乗り、オリジナルデザイン「たき火台」へ貢献することでカラ松の安定した仕入れをスタートさせた。これは、地元鉄骨加工業者とタッグを組み、独自デザインで薪販売との相乗効果を注目を得ている。需要を喚起し、森林サイクルの実現につなげていく」と話している。



焚火台にくべた薪。同社は「技術でつなぐ木の暮らし」をキャッチコピーに掲げ、次の世代に緑豊かな山をつな

木材を全面に強調し、クセスが増えてお

た非常に目立つ図柄、若年層からの反

ク